The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中村哲医師のアフガニスタンにおける活動から公衆衛生の原点をみつめる
Author(s)	高鳥毛, 敏雄
Citation	大阪公衆衛生. 2020, 91, p. 2-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78695
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言

中村哲医師のアフガニスタンにおける活動から公衆衛生の原点をみつめる

高鳥毛 敏雄
関西大学社会安全学部・社会安全研究科

１．はじめに

中国の武漢ではじまった新型コロナウイルスが、周辺の地域、国に拡がり、パンデミックとなっています。感染症は今日でも重要な公衆衛生課題であることを再認識させられます。新型コロナウイルス感染症の流行はどこまで拡大するのか緊迫度が高まっています。グローバル社会となり感染力の強い新感染症が登場すると瞬く間に世界に拡がることを現実のもとして再び示しています。

今回は、アフガニスタンで住民の命と健康を守る活動をされてきた中村哲医師について書かせていただくことにしました。中村哲医師は、福岡市のNGOペシャワール会の現地代表者でした。2019年12月４日（日本時間午後）、アフガニスタン・ナンガルハル州の州都ジャララバードで、車で移動中に銃撃され、死亡（73歳）されました。中村哲医師のアフガニスタンにおける30年余りの活動は、公衆衛生とは何かを考えさせるものでした。中村医師の足跡をたどり、公衆衛生について、原点に返り考えてみたいと思います。

中村氏の活動の意義を理解するには、活動の舞台としていたアフガニスタンについて社会的な背景を知ることが必要です。そこで、①アフガニスタンの地理と地勢、②パキスタンとアフガニスタンとの関係、③中村医師が拠点としていたペシャワール、④アフガニスタンの地政学（政治･軍事）的な位置づけ、⑤大干ばつと地域の生活復興、⑥診療所から井戸掘りや灌漑用水路建設、など多くのことを理解する必要があります。本稿では、アフガニスタンの歴史、政治的な背景について書かせていただきます。中村哲医師は、昆虫を追いかけて、アフガニスタンに足を踏み入れたようです。アフガニスタンは、現代の政治経済社会の縮図のようなところです。歴史的に、インド北部で起こった仏教が中国や日本に伝来する通過点でもあります。人々の生命や健康は、地勢、民族、自然、地政（政治、経済）などが大きく影響していることを中村医師の活動から知ることができます。その点を中村医師のアフガニスタンにおける実践活動からみることができます。そこで、中村医師のアフガニスタンにおけるハンセン病診療からアーベ・ワルワリード建設に至った活動について、書かせていただくことにしました。

２．アフガニスタンと中村医師

アフガニスタンと中村医師を結びつけたものは「昆虫」と「山」です。九州大学医学部を卒業して精神科を選んだのも「山」と「昆虫」との関わりを続けるためであると書いています。アフガニスタンにはじめて足を踏み入れたのは、「福岡登高会」のヒンドゥークシュ遠征隊の随行医師として同行したことからです。ヒンドゥークシュ山脈は、アフガニスタンの北東から南西に1,200kmにわたり拡がっています。日本列島に例えますと東北地方から近畿地方にまで連なる山脈ということになります。最高峰がティリチミール（7,708m）です。アフガニスタンという国の大部分がこの山脈に覆われています（図１）。

ヒンドゥークシュ山脈の北麓にあるのが「パミール高原」です。パミールとは、世界の屋根という意味です。高原の周囲は7000m級の山で囲まれています（図２）。世界の屋根と言われる山脈に囲まれているのがアフガニスタンとパキスタンの北部地域です。このような自然環境が、多様な生物の生態系をつくりだしています。そこにあるのがパミール高原です。この高原はモンシロ

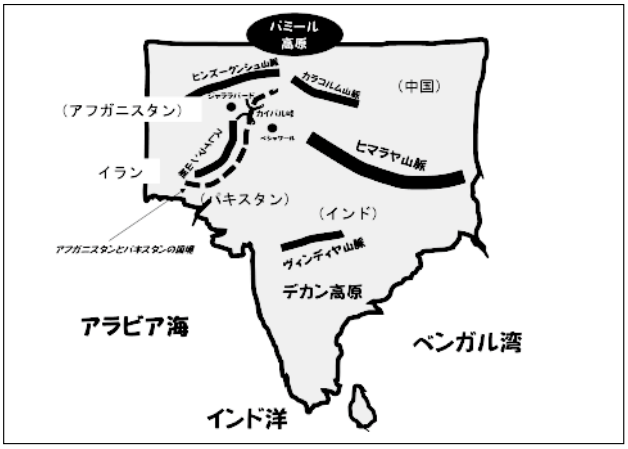

図１　アフガニスタン、パキスタンの国境

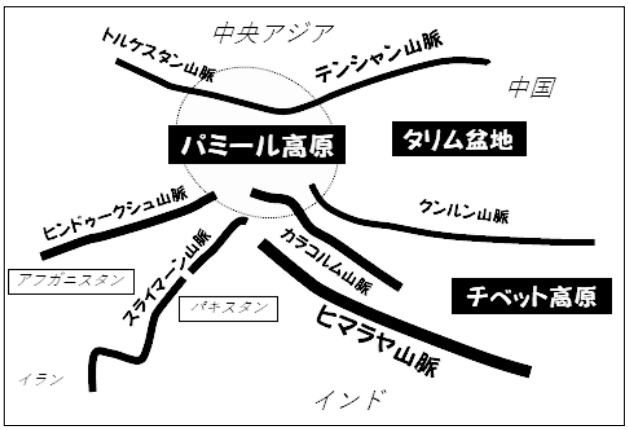

図２　アフガニスタン北部の山脈と高原

チョウの原産地とされています。高山地帯であることから氷河期の遺物と言われる昆虫、特にアゲハチョウ科のパルナシウスが生息しています。昆虫を趣味としていた中村医師にとってヒンドゥークシュ山脈のエリアはとても魅力のあるところであったようです。そこに惹かれた山岳隊に同行してアフガニスタンに足を踏み入れたことがその後中村医師とアフガニスタンとの生涯のつながりになるとは当初は思っておられなかったものと思われます。

アフガニスタンから帰国した後、中村医師は民間病院の医師となりました。1983年に、日本キリスト教海外医療協力会（以下、JOCS）からペシャワールの「ペシャワール・クリスチャン・ホスピタル」からハンセン病の診療医師がいなくなったので医師募集していると連絡があり、それを受けて1984年９月にJOCSの派遣医師としてアフガニスタンに赴任しています。中村医師は、アフガニスタンの高原の昆虫に関心があり引き受けたと書いています。現地の病院に赴任すると医療器材はなく医療設備も壊れたものが多く驚いたと書いています。ハンセン病の患者は神経障害があるために足を保護するためには靴を必要ですが、適切なものがありませんでした。また、怪我や障害を持つと患者ごとに特別な靴を必要となります。そのため、中村医師は靴をつくる職人のように靴をつくることが患者の治療や障害の悪化予防の最も大事なこととして靴づくりをしています。また、実際に診療するのに必要な器具がそろっていない中で、患者の診療体制をつくることに大変な努力をされています。JOCSの派遣医師としての契約期間が1990年５月に終ると、ペシャワール会が中村医師のアフガニスタンの医療活動を支援することとなりました。

1983年９月に中村哲医師がアフガニスタン・パキスタンにおける医療活動を支援する目的で国際NGO（NPO）団体のペシャワール会が結成されています。ペシャワール会と現地の中村医師が二人三脚となって、アフガニスタンにおいて住民の生命と健康を守るための実に臨機応変で、実践的な活動が遂行されてきました。

３.「ペシャワール」とアフガニスタンとの関係

ペシャワールは、パキスタンの都市であるが、なぜアフガニスタン東部の医療支援活動の拠点とされているのか、このことを理解するには、ペシャワール地域の歴史を理解する必要があります。ペシャワールは、インダス川上流のガンダーラ地方の中心都市発展してきたところです。１～３世紀頃にあったクシャーナ王朝の頃にペシャワールはその首都でありました。その時代は「プルシャプラ」の名称の都市でした（図３）。その名称は、サンスクリット語の「国境の町」を意味するプラシャ・プラに由来しています。

ペシャワールは、古代から東・西・南・北の交通の要衝であり、世界の民族と文明の十字路であります。

「ガンダーラ」は、アフガニスタン東部からパキスタン北西部にかけての地域を指していました。ガンダーラは、アレキサンダー大王が建設したギリシアの植民都市でした。そこで、最初に仏像が作られ、仏像にはギリシア文化のエッセンスが加えられました。クシャーナ朝の支配下で仏教が信奉され、ガンダーラは仏像美術や文化の黄金時代を迎えています。特に、カニシカ王（在位：128－151年）の統治下が最盛期でした。ガンダーラの美術文化は、中央アジアを通って東西の諸国に伝来していきました。

中村哲医師が活動していたペシャワールからジャララバードやカーブルにかけての地域は、古

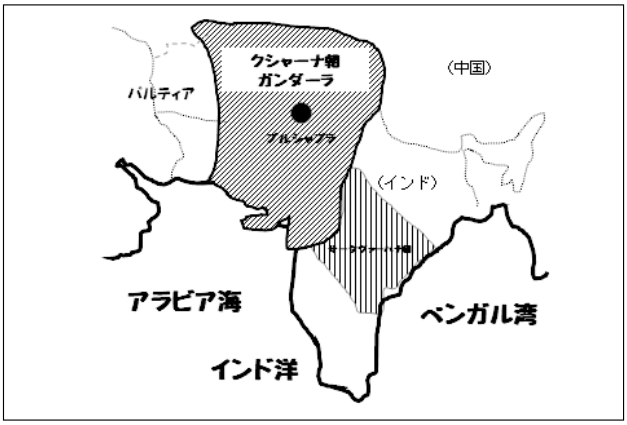

図３　クシャーナ王朝の領域（ガンダーラ王国）
（カニシカ王（２世紀）が最盛期）

代において世界の文明・文化の融合の地であり、また世界で最も先進的な文化が育まれていた地域だったのです。現在は、間にアフガニスタンとパキスタンとの国境線が引かれ、分けられています。しかし、文化的、民族的に同質の人種で構成されている一つの地域でした。ガンダーラ王国は12世紀頃にイスラム王朝により滅ぼされ、いまはその名称が残っていません。

４．近代におけるパキスタンとアフガニスタンとの間の民族分断

アフガニスタンの南および東は「パキスタン」、西は「イラン」、北は「タジキスタン」「トルクメニスタン」「ウズベキスタン」、東端は「中華人民共和国新疆ウイグル自治区」の国々があります。アフガニスタンの東側には7,000 ～ 8,000m級のカラコルム山脈とヒマラヤ山脈があり、南北の行き来を阻む壁となっています（図１）。アフガニスタン東部にはスレイマン山脈がありますが、周辺の山脈と比べると3,000m級と比較的低く、その山脈には通行できる歴史的な交通路ができています。その通路が、古代インドの文化を西アジア、中央アジア、中東、中国に伝えてきました。その山脈の中の峠の一つの「カイバル（カイパー）峠」は最も有名で、古くから東西の文化圏を結ぶ交易路として重要な交通路とされています。アフガニスタンに入ると「ジャララバード」や「カーブル」などのアフガニスタンの主要都市がありこの国境を超えて人々の移動が活発です（図４）。

インド北西部に発祥した仏教が中国に伝来したのもアフガニスタン東部の通過路からです。北に抜けると東西の交易路のシルクロードにつながります。たとえば、古代ギリシアのアレキサンダー大王の軍隊も西アジアからこの山脈を超えてインドに至っています。インドの仏教も、この山脈を

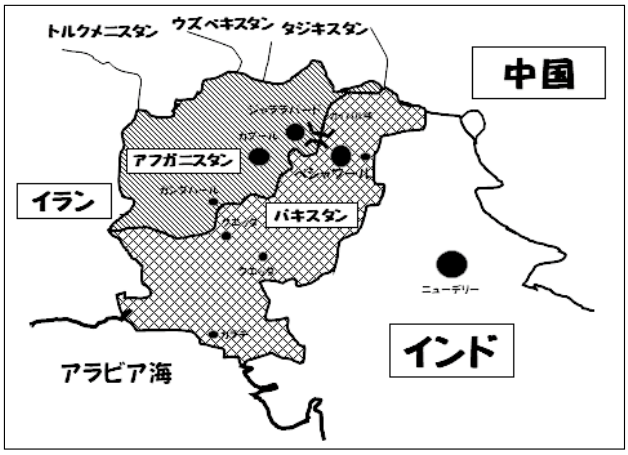

図４　アフガニスタンとパキスタンの都市

通り中国に伝来し、6 世紀に中国の玄奘三蔵（唐代の僧、玄奘三蔵は、興福寺や薬師寺などの法相宗へと繋がる系譜に位置づけられ、日本仏教との関わりも非常に大きい。また、「西遊記」の三蔵法師のモデルになった人物としても、よく知られている）もこの山脈を越えてインドに巡礼し、仏教研究を行い経典や仏像などを中国（唐）に持ちかえっています。

近代に入ると、ロシアが急速に台頭し、インドを支配していたイギリスとの間に緊張関係が生じて、この地域が世界の地政学的な緊張地帯となっていきました。ロシアは1893年に南下政策をとってきたため、インドを支配していたイギリスはアフガニスタンを緩衝国として、そこでロシアの南下を止める政策をとりました。アフガニスタンとパキスタンとの間のスレイマン山脈を挟む国境地帯が両国の緩衝地帯（**デュアルランド・ライン**）とされました。そのため、スレイマン山脈を挟んで地域が２つに分断されました。多数派民族のパシュトゥン（約1600万人）が住んでいた地域が国境を隔て二つに分けられたのです。国境線が引かれても、両地域に跨がって血縁関係がある人々が多く住んでいるため住民の行き来が活発です。現在も、アフガニスタン側に戦乱や干ばつなどが起こると人々は、パキスタン側に流れていきます。落ち着くと帰還することを繰り返しています。

５．20世紀のアフガニスタンの地政学的な位置づけ

アフガニスタン国は、**ヒンドゥークシュ山脈**による尾根と谷により地理的に分断されています。ヒンドゥークシュという名称は、「**インド人殺しの山**」という意味です。それだけ人々は土地の険しさに悩まされていたことになります。ヒンドゥークシュ山脈によりつくられた無数の深い谷ごとに民族や部族が住み20以上の民族とそれぞれの言語が入り乱れたモザイク国家となっています。このような地理的条件が中央と地方との結びつきを弱め国家統治を昔から難しくしています。日本も戦国時代において東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州の間に山脈や海があり、一つの国として天下統一ができない状況にあったことを考えると理解できるのではないかと思います。日本の山脈は高々 3,000m級程度ですが、アフガニスタンは7,000m級の山脈で阻まれています。そのためアフガニスタンでは兵農分離をすることが難しく農民は自らの力で村を守るために兵士として闘う存在でもあります。アフガニスタンに古代から大国が侵入を繰り返してきたことを考えると村

を守るために兵農分離は非現実的な地域でした。古代からアフガニスタンには、ペルシャ、モンゴル、インドの王朝の侵入を繰り返してきました。住民は、高い山々の自然の障壁と、自らが兵士として闘うことにより、ペルシャ、インド、英国、ロシアなどの大国による絶対的な支配を免れてきています。

20世紀には、ロシア、英国、ソ連、米国などの世界の大国が攻防を繰り広げる前線として戦場とされてきました。近代の紛争の火種は、ロシアが台頭して侵攻してきたことによりはじまります。インドを支配していた英国はロシアの南下を脅威として、それをくい止める防波堤としてアフガニスタンを位置づけました。英国はロシアの南下政策を阻止するためにアフガニスタンを英国の支配下におこうとアフガニスタンと３回にわたる戦争を仕掛けています。最終的にアフガニスタンは英国の支配を免れて1919年に英国からの独立を果たしています。そして、1973年には共和国となりました。独立したアフガニスタンは、イスラム国としてその勢力を拡充していきました。イスラム勢力の拡大に共産主義国家のソ連が恐れをなして1979年末にアフガニスタン侵攻してきました。当時は、東西冷戦構造下であったことから、ロシアが侵攻してきたことを阻止するために米国も軍事介入するようになりました。

中村哲医師がアフガニスタンへの医療援助のためにペシャワールに派遣され、アフガニスタンで医療活動をはじめた1983年はこのようなソ連と米国がとの緊張が高まっていた時期でした。この後、ソ連は国力が衰えアフガニスタンから撤退をはじめ1989年に撤退を完了しています。そしてソ連は1991年に崩壊しています。

６．戦乱と大干ばつによる大量の難民発生

ソ連が撤退した後は、アフガニスタンは内戦状態となりました。それでも中村医師は、アフガニスタン西部山間部の無医地区に診療所をつくり医療支援の輪を拡げていこうと尽力しています。しかし、アフガニスタンでは1991年に中東で湾岸戦争がはじまったことにより、タリバンの勢力が拡大して、1997年にアフガニスタン・イスラム首長国としてタリバン政権がつくられました。このタリバン政権を米国はテロ集団とみなし軍事的攻勢を活発化させていきました。1998年にタリバンがアフガニスタン全土を制圧したことから米国は国際社会を巻き込んで掃討作戦を強化し、さらに経済制裁を加えていきました。米国は国連に働きかけ第一次タリバン経済制裁を発動させています。そんな中で、中村医師は戦乱を避けながら、アフガニスタンの山岳奥地の人々の診療をするための拠点をつくることを続けていました。

ところが、2000年にアフガニスタンを100年に一度の大干ばつが襲われたことにより、中村医師のアフガニスタンにおける診療活動の方向を大きく変化させることになります。大干ばつにより、農作物はつくることができなくなり、食糧難・生活難に陥り、農民は土地を捨てて難民としてパキスタンに流出していったからです。診療所で患者を待っていても地域の住民がいなくなったことから、住民の生命と健康を守るには難民化していく住民を少なくし、難民化した住民が帰還してもとの地で生活できる環境を整えることが目標とせざるを得なくなりました。診療所で待っていても人々の生命と生活を救えないことが自明となりました。中村医師は、診療所の外に出て、住民が生活できる生活環境をつくる活動をすることを決断されました。まず、生活用水を確保することが住民の生命と健康を守るために最も大切なことであるとして井戸を掘削する活動をはじめました。ペシャワール会に働きかけ、水を確保するための井戸掘削の資金援助をもとめました。その資金をもとに掘削した井戸数は1,000以上にのぼると報告しています。しかし、井戸水は不安定で水源であり、住民が帰還して安定的に農業を再開することにはつながりませんでした。

この大干ばつのために食糧難で大量難民が発生しているアフガニスタンに対して国際社会は食糧支援をするよりも、米国が求めるタリバン政権への経済的な制裁圧力を強めるため、2001年に国連を巻き込んで第二次経済制裁を発動しています。経済制裁によりさらに住民の食糧不足が深刻化して、パキスタンへの難民数を大幅に増加していました。タリバン政権は、米国に報復として2001年12月に米国に同時多発テロを決行するに至りました。この報復のため米英が結束してアフガニスタンに対する空爆など軍事攻撃を激化しました。まさに復讐の連鎖がとまらない状況に陥りました。戦乱という人為災害と大干ばつという自然災害の複合災害に見舞われている現地の状況の中で中村哲医師は日本に帰還せず、アフガニスタンにおいて医療支援や人道支援に徹した活動を継続されています。中村医師は、アフガニスタンに赴任した時にこのような国際的な大国の衝突と自然災害が住民の生命と健康を守る仕事の前に大きく立ちはだかる事態となるとは思ってもみなかったものと思われます。

この中東やアフガニスタンの治安の悪化に対し

て、米国は日本に自衛隊を派遣して軍事攻撃の後方支援を求めてきたため日本政府は中東支援のために自衛隊派遣の検討を始めました。テロとの戦いへの参入について審議する衆議院の「テロ対策特別委員会」に中村医師が参考人の一人として2001年10月13日に招聘されています。その場において、中村医師は、自衛隊の派遣が現地の日本人を危険にさらし、現地での活動を困難にするとしていう趣旨のことを述べておられます。むしろ日本がなすべきことは現地の大干ばつに対する人道的な対策と緊急の食糧支援であると主張されています。

2002年以降、中村医師はアフガニスタンに必要なものは「**百の診療所よりも一つの用水である**」と、「緑の大地計画」の打ち出し、その実践こそが住民の生命と健康を守ることにつながるとしてその活動に専念されています。土木工事のド素人だが、自分がやるしかないとスコップとショベルカーの運転もしています。白衣と医薬品では人は救えないとの思いを強くしたようです。

2003年に全長13キロの灌漑用水路「アーベ・マルワリード」を着工しています。住民が労働力として理解と協力し、日本からのペシャワール会による民間資金を使って2007年に見事に完工しています。「アーベ・ワルワリード」というのは「真珠の水」という意味です。2009年にさらにマルワリード用水路・最終地点まで開通させています。その先の流域についても堰を改修し、一部は新設

図５　中村哲氏の診療所・灌漑用水路
（引用：ペシャワール会のホームページから）

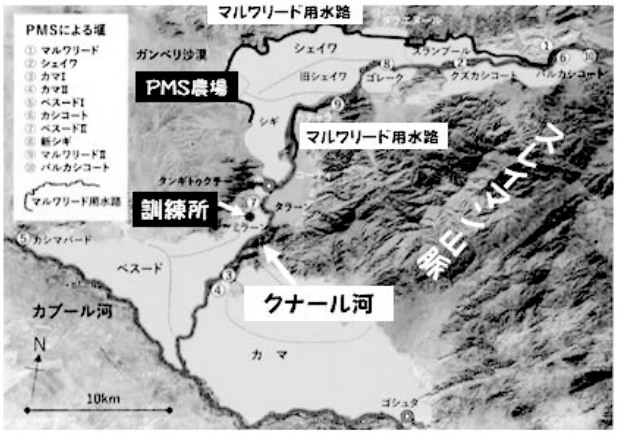

図６　PMSによる用水路及び堰の位置
ペシャワール会のホームページから

し、アフガニスタン西部の多くの乾燥地帯を緑の農地に変えています。2003年からはじめたクナール河流域27㎞の用水路とその取水堰・護岸工事・主幹水路の建設が完成し16,500haの干ばつによる不毛の土地と砂漠であった土地が、建設された灌漑用水により潤わされ、見事な緑に覆われたきれいな農耕地に変貌させています。そこに約65万人の人々が自給自足の生活を送れることを実現しています。さらに、中村医師が育てたアフガニスタン人がその他のアフガニスタンの地を農耕地に変えていく作業を継続しています。

アフガニスタンにおける大干ばつは、2000年だけでなく、その後も発生しています。

直近では、2018年にアフガニスタン国土のおよそ６割が干ばつの被害を受けています。国連は、350万人が深刻な食料危機に瀕していると報告しています。アフガニスタンは、長年の戦闘の影響で、用水路などの農業施設が荒廃しているうえ、ここ数年は、春から夏にかけて、気温が急激に上昇し、雪解け水が一気に流れ出す現象が起きています。ただでさえ、水を蓄える能力が下流には不足しています。そこに、ここ10数年では最悪とも指摘される干ばつが加わったのです。お金に困って、強制的に娘を嫁がせるケースが相次いでいるうえ、苦しい避難生活の足しとするために少年を働かせる教育の機会が失われています。子どもや女性といった社会的に弱い立場の人たちにしわ寄せが及んでいるようです。アフガニスタンから2014年に国際部隊の大部分が撤退した後も自前の治安部隊の育成と配置が進んでおらず、その隙を突くようにタリバンの攻勢が強まり、農村部を中心に戦闘が激化しています。

治安の悪化と干ばつという社会災害と自然災害の複合的な要因素によって、アフガニスタンは危機的な状況が続いていると言えます。食料や水、

薬などの支援は、アフガニスタン政府だけではまかなえず、国際社会の支援に頼らざるを得ない状況であるようです。避難民が当面の間、安心して避難生活を送るためには、仮設住宅や水道などの整備が求められます。しかし、資金不足などから、こうした支援も十分に行えません。

アフガニスタンは内政面では、有力者の間で体制派、反体制派との政治的な駆け引きが活発化していて、政府も干ばつ対策にまで十分に手が回らないのが実情のようです。アフガニスタンの干ばつは終わりが見えておらず、国際社会のさらなる支援が求められています。アフガニスタンはもう18年も戦争や内紛が続きいています。中村医師は、国内の政治紛争に巻き込まれて犠牲者になったものと理解しています。

７．天、共に在り

中村医師は、晩年好んで使われています。本のタイトルともなっている『天、共に在り』の意味を、そのタイトルの著書に書かれている「自然からの逃走」の項の文章を引用させていただきます。『現場を離れて帰国すると奇妙な違和感がまとわりついてくる。こざっぱりして綺麗な空間、行き交う人々が垢抜け見える。無粋で粗野な感じも土埃も、重機のうなりも、水争いも、飢えてさまよう人も、銃弾から身を守る必要もない。華麗な街路に、思い思いのおしゃれに身を包んだ若者や女性たちが目につく。平和な国である。しかし、なんだか物足りない。人の臭いのようなものが消え、「自然」もまた論評や撮影の対象になっても、わが身で触れて畏れや驚きや喜びを覚えるものでなくなっている。私達は、何かのベルトコンベヤーのようなものに乗せられ、車窓を過ぎゆく景色のようにしか自然を意識することがなくなっている。実の自然から遠ざかっている。メディアでの知識は増えても、自然は映像の知識の分だけ離れてゆくようにさえ思える。局限すれば私達の「技術文明」そのものが、自然との隔壁を作る巨大な営みである。時間や自然現象さえ支配下に置ける錯覚の中で暮らしている。知識を増やせば利口になるとは限らない。情報伝達や交通手段を発達すればするほど、どうでもよいことに振り回され、不自然な動きが増すように思われて仕方がない。』。

この言葉は中村医師がクリスチャンであるからの思いと思えません。アフガニスタンの厳しい自然環境の中で、そこに生きる人々はその自然からの恵みを得て生きていくしかないと考え、高い山脈から供給される河川の水を利用することによりもとの地で豊かな生活を取り戻すことができたという30年余りのアフガニスタンでの実践活動の中で得た経験からきているものと思われます。中村医師の「天、共に在り」の「天」とは、「神」という意味よりも、むしろ「自然」と考えるべきではないかと思います。中村医師は、「**自然を畏れ、敬い、共に付き合うことがなくなっている。人間が存在しえているのは自然とともにあるからである**」と日本人に伝えたいと考えていたように思われます。日本には石油や鉱物などの天然資源がないということが言われます。しかし、人間が生きていく上で最も大切な水と食べ物などの自然資源は世界の中で最も恵まれているという現実を忘れているのではないかと、また近年は自然災害が社会の関心事となり、自然を敵視し、自然との間に壁をつくって生活するようになってきています。アフガニスタンと日本を行き来している中村医師には日本社会の現実を目にして、地球環境や世界の現実とのズレを感じ、強い違和感を持たれていたことが伺えます。

８．20世紀という時代を振り返る

中村医師が活躍されてたアフガニスタンにおける学ぶと20世紀という社会の鏡のように思えます。ロシア革命などにより、社会主義こそが平和な安心できる社会を実現してくれると考えていましたが、その後、第一次世界大戦、世界恐慌、恐怖政治やファシズム政権が登場し、第二次世界大戦となりました。平和が訪れるとの期待も空しく東西冷戦時代となります。わずかに核兵器の恐怖が三度目の世界大戦を回避させています。ソ連が崩壊し、冷戦構造が終結しましたが、地域紛争はなくなっていません。資本主義経済だけが生き残りましたが、社会主義と資本主義のどちらでも理想的な社会に結びつかないことが明らかになったのが20世紀であったことだけが明らかになりました。カネとモノの経済（富）と力（軍事力）による世界は変わっていません。むしろ、資本主義経済だけが生き残ったことが地球温暖化の問題と生物多様性の危機問題、グローバル社会の危険性への対応を求めてきています。わずか100年あまりの期間に地球人口が３～４倍に増えています。今も地球資源を大量に消費する経済社会が拡大し続けています。人類が数万年の間に地球に与えた負荷をわずか100年でそれを大きく上回る負荷と影響を与えている現状の中で、我々の豊かな生活が成り立っています。地球が誕生して数十億年をかけて産み出してきた地球資源がわずか数百年の短期間に消費し尽くす社会をつくり出しています。

中村医師のアフガニスタンの活動をみると、20

世紀という時代がなんだったのか、また20世紀がつくりだした社会とは何だったのかを映し出しています。そのような矛盾した社会の中で人々の生命と健康を守るための実践活動をされてきたことになります。

中村医師が悟った自然と付き合い、自然を尊重し、自然とともに生きることにより、自然から糧を得て生活することの意味を示してくれているように感じます。それが、「**天と共に在り**」の意味するものであり、その延長に人類の平和な社会が訪れることになると考えていたように思います。

9．おわりに

国連の持続可能な開発目標（SDGs）の17のゴールがある。「1. **貧困**をなくそう」「2. **飢餓**をゼロ」「3. **すべての人に健康と福祉**を」「6. **安全な水**とトイレを世界中に」「10. 人や国の不平等をなくそう」「11. **住み続けられる**まちづくりを」「13. **気候変動**に具体的な対策を」「15. **陸の豊かさ**も守ろう」「16. **平和**と公正をすべての人に」「17. **パートナーシップ**で目標を達成しよう」の、17の中の特に10のゴールを目指した活動を実践していたことになります。SDGsの目標は、公衆衛生の原点であることを基本目標としているように思っています。ところで、2025年の大阪関西万国博覧会はメインテーマとして「**いのち輝く未来社会のデザイン**（Designing Future Society for Our Lives）」を掲げています。最近決まった３つのサブテーマは「**いのちを救う**（Saving Lives）」「いのちに力を与える（Empowering Lives）」「いのちをつなぐ（Connecting Lives ）」としています。また、国連の目標であるSDGsの達成とソサイエティ 5.0の姿を描くことを掲げています。万博会場は人工島で、海辺につくられています。海は、生命誕生の場でもあります。古代ギリシアの思想もインドで誕生した原始仏教の思想もその後のキリスト教やイスラム教の思想も、その源は自然と生物、人間とは何かを追求する中で産み出された共通の要素を有しています。

公衆衛生の思想は英国で19世紀に生まれたとされています。それを確立したのはエドウィン・チャドウィックです。しかし、彼の公衆衛生思想は、「ミアズマ説」に立脚してつくりだされたものとされています。そのミアズマ説は、実は古代ギリシアのヒポクラテス（紀元前400年頃）が主張していたものです。つまり、公衆衛生は、確かに英国で近代的な制度として産まれましたが、その根っ子にはギリシアのヒポクラティスの思想があるのです。そのヒポクラティスの思想を辿っていきますと、ヒポクラティスは、古代ギリシアのヘラクレイトス（紀元前500年）の影響を受けていたとされています。そのヘラクレイトスは、「**万物は流転する**」「**万物の源は水である**」と唱えています。彼は、自然哲学者と呼ばれています。自然をテーマとして哲学の探求を深めていました。中村医師が、自然の中で産み出される高山から流れてくる河川の水を、大干ばつによる砂漠化している土地に水を流し、農地を回復させる活動と通じるものがあるように思えます。

つまり、中村医師の活動は人間社会が長い歴史の中で営んできた人間と自然との共生によって、生命と健康を守ることをしてきた原点に立ち返ったものと考えることができます。

SDGs、2025年の大阪関西万国博覧会は、新しい概念のように思われますが、実は人間と自然、地球環境の原点に返る動きの中にあるものと考えることができます。

最後に、本稿の中村哲氏の思いについては著書「天、共に在り―アフガニスタン三十年の闘い」（NHK出版 2013年）がもっとも中村氏の個人的な思いが書かれているものと思っています。中村氏の考え方や思いについてはこの本の記述をもとに書かせていただいています。

10. 参考文献

1．中村哲、「天、共に在り：アフガニスタン三十年の闘い」、NHK出版、2013.
2．中村哲、「人は愛するに足り、真心は信ずるに足る：アフガンとの約束」、岩波書店、2010.
3．フランシーヌ・ティッソ著；前田竜彦，佐野満里子訳、「図説ガンダーラ：異文化交流地域の生活と風俗」、東京美術、1993.
4．中村哲、「アフガニスタンで考える：国際貢献と憲法九条」、岩波書店、2006.
5．中村哲、「医者よ、信念はいらないまず命を救え!：アフガニスタンで「井戸を掘る」医者」、羊土社、2003.
6．中村哲、「医は国境を越えて」、石風社、1999.
7．内村鑑三、「後世への最大遺物；デンマルク国の話」、岩波書店、2008.
8．木原志乃、「流転のロゴス：ヘラクレイトスとギリシア医学」、昭和堂、2010.

表１　中村哲医師のアフガニスタンの人々の生命と健康を守る活動の歩み

西暦年	月	出来事
1946	9	誕生
1973	3	九州大学医学部卒業
		国立肥前療養所勤務
1975		大村労災病院勤務
1978	6	ティリチミール遠征隊同行医師としてパキスタンに初入国
		脳神経外科病院勤務
1983	4	ＪＯＣＳ（日本キリスト教海外医療協力会）がペシャワール派遣決定
	9	ペシャワール会発足
1984	5	ペシャワールのミッション病院でハンセン病の診療開始
1986	4	ＡＬＳ（アフガン・レプロシー・サービス）設立
1987	1	アフガン難民キャンプへの巡回診療開始
1989	1	ＡＬＳがＪＡＭＳ（日本・アフガン医療サービス）に改称。アフガニスタンの無医地区診療開始
1990	1	ＪＯＣＳの2期約７年を完了
1991	12	ＪＡＭＳがダラエヌール診療所を開設
1992	12	ＪＡＭＳがワマ診療所を開設
1994	4	ペシャワール会がＰＬＳ病院を設立
1998	4	ペシャワール会がＰＭＳ（平和医療団・日本：ピース・ジャパン・メディカルサービス）病院を設立し、ＰＬＳとＪＡＭＳの医療活動を統合する。
2000	7	井戸の掘削、カレーズの修復を図った水源確保事業を開始
2001	3	ＰＭＳがカブールに五か所の臨時診療所を開設
	6	ダラエヌールで灌漑用の大井戸に着手
	10	ペシャワール会が食糧配給計画「アフガンいのちの基金」を発表。
2002	2	ＰＭＳ、「緑の大地計画」を発表
2003	2	ダラエヌールにおける全長１３キロの灌漑用水路の掘削計画立案
	3	用水路「アーベ・マルワリード」の着工式開催
2006	4	井戸飲料水原事業全面停止。灌漑事業（用水路、取水堰建設）に集中決定
2007	4	マルワリード用水路第１期工事（１３キロ）完工
2009	8	マルワリード用水路・最終地点開通
2010	2	マルワリード用水路（全長約２５キロ）・マドラサとモスクの竣工式
	8	インダス河全域で大洪水。死者不明1800名、用水路各所が決壊、改修・補修工事）
	10	カマ第二取水堰・ベスード護岸工事着工（ＪＩＣＡ共同事業）。
2011	4	カマ第１、第２取水堰と主幹水路の竣工式。ベスード第１取水堰着工
2012	3	シギ送水路・洪水路横断サイフォン着工
	4	ベスード第１堰、ベスード護岸の竣工式
	8	ベスード・タブー堰完工
2013	6	カシコート護岸工事（４キロ）完工。植樹７５万本を達成
	8	アフガン東部で大洪水。シギ送水路完工
2018		アフガニスタンの国家勲章を受賞
2019	10	アフガニスタンでの長年の活動が認められ、同国の名誉市民権を授与
2019	12	アフガニスタンにて永眠される

中村哲「天、共に在り ： アフガニスタン三十年の闘い」（NHK出版、2013）の年表をもとに作成.